

ツクや重機を借り受け、葬儀社からは調理道具と調理人、人員を運ぶバスの提供を受けて、炊き出しの下ごしらえを行う。そして、下ごしらえや必要な道具がすべてそろった時点で被災地へと出発している。これは僧侶を中心としながらも、企業や地域住民、地域の役場職員など、さまざまな立場の人が一緒に活動する形の支援であり、素晴らしいモデルケースといえる。

- (18) 布教の時、僧侶の間では重要だが横信徒には理解の難しい内容をそのまま話す人がいる。これは、話を聞く相手のことを考えず、自分の話は周囲の僧侶が聞いたらどう思うかということのみを意識した布教である。これと同様に、被災地での活動も、目の前にいる人ではなく、これを行ったら宗派や周囲の僧侶はどう思うかばかりを気にして活動を考えている人がいる。日頃の人間関係が、同じ宗派、同じ地域の僧侶とばかり接しているうちに、自身が横信徒や苦しい立場にいる人を置き去りにして、自分の所属している教団や地域僧侶の日ばかりを気にして活動を考えていることに気づいていない場合がある。

- (19) 広井良典氏『ケアを問い直す——「深層の時間」と高齢化社会』（ちくま新書、一九九七年二月）参照。

- (20) 現在ひとさじの会では、岩手県陸前高田市と大船渡市を含む気仙地区の観音三十三霊場という祈りの道を再生させ

るプログラムを進めている。仮設住宅からさらに居を移すことになっても、小さな地域の観音堂は変わらない祈りの場となるはずである。そして、巡礼が慰霊ともなる霊場めぐりは、地元のみならず、多くの人が産業の少ない気仙地域に足を運ぶことになるだろう。これに加えて、土地の人が宗派に関係なく口伝えて伝承する念仏を共に学び、現地の人々と共有し、霊場巡りをする際に伝えていくことができれば、真に仏教によって地域と人とを結ぶことにもなるのではないかと考えている。

- (21) 湯浅誠氏『反貧困——「すべり台社会」からの脱出』（岩波新書、二〇〇八年四月）は、住居や財産、人脈、文化、思想、慈愛など、人が生きるうえで必要な諸々の蓄えを「溜め」と表現している。溜池のように、日頃意識することはないが、火事がおればこれを消すこともでき、飢饉時の飲料とも田畑を耕すときの水ともなるものである。仏教の寺院僧侶にはこの「溜め」が豊かにある。これは被災地のみならず、現代社会においても活用されることが望ましいものである。

特集

大災害と文明の転換

3・11 二一世紀の置書事始

緒言

「爲向後心得 如此書付畢」（今後の心得のためにこのように書き記しておく）

置書としてよく知られる菅原文書は末尾にこう記して終わっている。置書とは、このように規則・約束・決まりごとを後々のために書き記して置くものを言う。地域に伝承される知として貴重なものである。

わたくしは今、これまで地球に起こったことのない大きな事故や圧倒的な自然災害に直面して、正直、ことばの力には虚しさを感じている。しかし、一方で、今こそ、ことばを操るわたくしたちは、知恵と良心を結集して、

未来の伝承知となる復興の物語を書かなければならないということも痛感している。わたくしごときがそのようなものを書けるとは思えないが、置書となるものの資料を提示する努力はしなければならない。この小論を書く目的はそこにある。

以下、3・11東日本大震災の前年宗教界で盛んに議論された二つのテーマの代表的論者として島田裕巳、山折哲雄を取り上げて、震災前後の人々の関心の移り行きをクリティカルに概観してみる。ついで、震災における宗教者に関する社会的反応の例として、若い禅僧に関するウェブ上の書き込みを取り上げる。また、阪神淡路大震災や中越地震の時に比べ、3・11以降は宗教者の被災

おかだ まみこ

岡田真美子

者支援に光が当てられる傾向にある。特に未曾有の原発事故にこれから向き合っていかなければならないとき、精神界を支える宗教者の役割は大きい。この問題にからんで、最後に我々の果たすべき「転換」について考察してみたい。

一、震災直前——無縁社会と葬式無用

東日本大震災の一年前、二〇一〇年一月から三月にかけてNHKは「無縁社会」をテーマにニュースや特別番組でキャンペーン報道を行った。自殺、孤独死、児童虐待といった人間関係の断絶が取り上げられ、反響を呼んだ。宗教関係の講演会のテーマとして、この「無縁社会」は頻繁に取り上げられた。

同一年一月、宗教学者島田裕巳の「葬式は、要らない」(幻冬舎新書)が出てベストセラーとなった。この本は震災前の宗教関係議論のもう一方のビッグテーマを提供することになる。島田の著作は、震災前と震災後で執筆傾向が変わっている。震災後の転換ということではわかりやすい例である。

のを省略して「葬式を簡略化する」ことに主眼が置かれているように見受けられる。

例えば、島田は次のようにいう。

「葬式をあげるのは普遍的なことだが、日本人が葬式に相当な費用をかける点は、決して普遍的なことではない」⁽²⁾

つまりこの本は単に「葬式は、要らない」ではなく、

「『こんな』葬式は、要らない」なのである。

しかし、このセンサーショナルな書名に驚いた宗教界には、「葬式は必要だ」と訴える人が続出した。そういう人たちが議論に用いる価値尺度はお金ではない。そして彼らの議論の目的とするところはもちろん、いかに葬礼というものが我々にとって大切なものであるかということを示すことであつた。ところが、「葬式は、要らない」を読めばわかるように、島田は葬式の必要性など百も承知のことであつた。

島田の本が出た三か月後の四月には一条真也の「葬式は必要——最後の儀式に迷う日本人のために」(双葉新書)が出て議論はますます過熱し、テレビでトークバトルが繰り広げられたりした。⁽¹⁾

現代は便利なものでバトルの模様はインターネットのYouTubeで簡単に見られる。この番組の議論で印象的だったのは、冒頭からずっと焦点になっているのがお金の問題だったことである。二〇〇七年日本消費者協会の調査として、一人当たりの葬式費用が二三万円と紹介され、この数字はその後もちこちで引用された。葬祭業者である一条にとって金銭的問題が第一義的関心事であるのはわかるが、この数字は、宗教学者島田の著書でも第一章の第三項目という早い段階で登場しているのに驚く。現代社会で価値をはかる一番のもののさしは「お金」であるということなのだろう。

島田の著書は、書名で「葬式不要論」を謳いながら、実は「葬式賛沢論」であり、葬式そのものの要不要を論じるというよりは、お金と言う価値尺度を用いて、費用対効果の低いもの、或いは寺院に多額の費用をとられるも

「人類が大昔から葬式を営んできたのも、そこに一定の役割があるからである。人は、誰かかわりがあった人が亡くなれば、それを弔いたい。少なくとも、その死を確認して、けじめをつけたい。葬式への参列ほど明確なけじめの機会はない」⁽³⁾

と彼は記している。(ただしそれに続いて「葬式を出すことと、葬式に多額の費用をかけることは直結しない」と添えることを彼は忘れていない。)

したがって、残念ながら宗教界の「葬式は必要」と訴える人々と島田の議論はかみ合わなかったのである。

その一方で、島田を講師に呼んで現在の葬礼のあり方を顧みようと言う僧侶たちも出てきて、彼の起こした「高くつく葬式の見直し」という企てはある意味成功したようであつた。

続いて、島田は震災直前、二〇一一年三月五日、『墓は、造らない 新しい「臨終の作法」(大和書房)を上梓した。論調はほぼ同じである。つまり、こんな墓に高額の費用をかけることは無意味だろうということを全7章中